

## Manchester Pathology 2021 参加報告

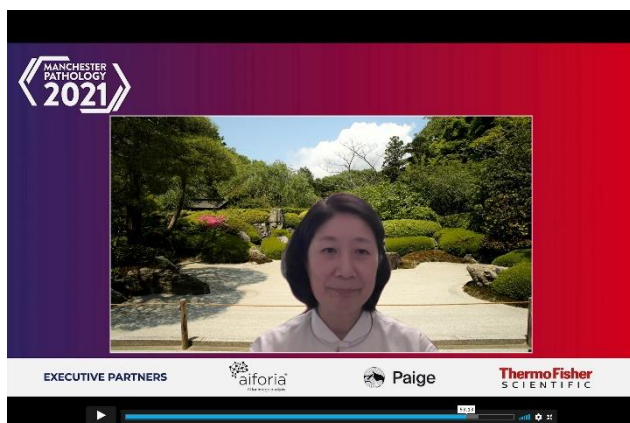
日本大学医学部病態病理学系腫瘍病理学分野

増田しのぶ

British division of IAP と英国病理学会との合同開催による Manchester Pathology 2021 (July 6-8)に、英国病理学会から招聘された日本病理学会の病理医(シニア)として参加しました。昨年からの COVID19 世界的大流行により、すべてがオンラインでの運営で、今後の学会運営の参考になる点もあろうかと思っておりますのでご紹介いたします。

演者はあらかじめ Zoom 録画ファイルを mp4 ファイル形式で学会運営事務局に送付します。座長も演者もすべてオンライン参加であり、専門の技術者がサポートしていました。ポスターも口演も録画を流し、その後リアルタイムで質疑応答が行われました。質疑応答には、学生教育などで教室全体を小グループに振り分けるときに利用する Zoom の break out 機能を、逆に利用している点が興味深かったです。つまり、座長、演者はあらかじめ green room という small group に隔離されており、時間になると、学会員が参加する Zoom 広場に送り出されました。質問は質疑応答が始まる時間のまえに、あらかじめオンライン上で受けつけられており、座長がまとめて質問する、というスタイルでした。これらの画像はその後、オンデマンド方式で閲覧可能となっています。従来の発表と異なり、一定期間オンデマンド方式で配信になりますので、著作権に配慮したスライド作成や、録画作業に手間がかかりました。

学会のプログラムは、日本病理学会総会にくらべると小規模でしたが、COVID19 に関するセッションや、next generation sequence や人工知能などトピックスに関するセッションが大きく取り上げられているのが印象的でした。わたくしが参加した乳癌のセッションでは座長、演者 7 人のうち 6 人が女性であり、また、学会参加者にはダイバシティが感じられました。



さて、今回対面での人的交流がないため、学会前日にリモートによる social event を企画  
くださいました。招聘して下さった英国病理学会の会長 Prof. Adrienne Flanagan  
(University College London)、次期会長 Prof. Mark Arends (University of Edinburgh)、  
Prof. Heike Grabsch (Maastricht University Medical Center)、Prof. Graeme Murray  
(University of Aberdeen Scotland)と、日本病理学会副理事長 小田義直教授とで限られた  
時間ではありましたが、オンラインにて交流することができました。ちなみに会長の Prof.  
Flanagan も女性であり、骨軟部腫瘍がご専門の病理医です。秘書の Miss Roselyn Pitts は、  
ロックダウン中はロンドンのオフィスには出勤せず通常業務も完全にリモートで行なっ  
ているとのことで、英国で手配した紅茶とクッキーが東京三鷹のサービス支所からあつとい  
う間に配送されてきて、びっくりです。報道などで聞いていた Zoom 飲み会、楽しいのか  
しら？と想像していましたが、どんな状況になっても、その時にできる手段で人々が交流す  
る、とそこから生まれるものは何かしらあるのだと思います。学会という学术交流の場が、  
今後も様々な工夫がなされて発展していくことを期待したいです。